

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 張 鈴

論 文 題 目

戦時下における自由主義者の行動論理
—豊島与志雄、谷川徹三と中国との関わりから—

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 坪井秀人

委員 名古屋大学 教授 加藤國安

委員 名古屋大学 准教授 日比嘉高

委員 関西学院大学 教授 大橋毅彦

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、小説家豊島与志雄および哲学者谷川徹三の著述を分析し、中国との関わりを主軸に戦時下の彼らの思考と行動論理を解明し、戦前期自由主義者が日中戦争期においてどのような役割を果たしたかを考察するものである。

論文全体は序章・終章を含め全10章より成り三部構成を取る。補論として orient の訳語に関する研究論文（漢字文化研究奨励賞受賞）が付されている。このうち3篇は学術雑誌掲載の審査付き論文である。写真版と翻刻・改題による「豊島与志雄 1940年3月中国訪問ノート」（『豊島与志雄著作集』未収録）を付録として巻末に付している。

第一部は戦前戦中期リベラリズムの特質を概説するものであり、第1章では、十五年戦争期の自由主義を1935、39、43年を画期とする三つの時期に分けて、自由主義の発展過程について概観し、自由主義による文化擁護の視点から谷川徹三と豊島与志雄の再評価を行っている。第2章では、谷川徹三の中学校から高校までの作文集『五十の日』を調査して谷川の精神形成の過程を検証し、大正期教養主義が煩悶青年としての若き谷川にどのような影響を及ぼしたかについて考察されている。

第二部では豊島与志雄の汎アジア主義の思想を中国との関わりから検証し、戦時期の知識人の行動論理について考察されている。第3章は、1940年3月の豊島の上海訪問を例として、未公開資料をも用いて豊島の捉えた都市上海の意味について論じ、豊島の上海の民衆に対する共感を認めながら、そこに内在する日本中心的な思考が現地知識人のそれと大きく隔たっていたことを検証している。第4章では、『白塔の歌』所収の中国関係の小説を分析して、戦時期と戦後1949年における豊島の汎アジア主義的な心情について論じ、彼の戦争責任の所在を批判的に追究している。第5章では豊島の批評や同時代日中の資料をもとに〈東亜文芸復興〉という提唱の持った意義について考察されている。日中知識人の間には西洋志向などの共通性に加えて多くの不協和の存在が指摘され、豊島の国策協力についても批判的に論及されている。

第三部では戦時期の谷川徹三の活動を対象に、第二部と同様、戦時期知識人の行動論理について考察されている。第6章は1930年代末の論文「東洋と西洋」を中心に、谷川の東西比較の論説群の展開を追い、その比較論が三木清と和辻哲郎の世界史観の間で振れていたことを明らかにしている。第7章ではバートランド・ラッセルの平和主義の揺らぎを谷川が相似的に反復していたことが指摘され、戦時期の谷川の思想において戦争支持と平和主義とが共存していることの意味について考察されている。

第8章では、戦中から戦後にかけて数度に及んだ谷川徹三の中国旅行について時系列的に整理し、そこから生みだされた谷川の中国関係の作品について、中国語に訳された三種類の文章を読解し、谷川自身の思想と翻訳を通してそれを受容した中国知識人の反応の両面から分析して、日本占領下の中国人と接触した戦時下の谷川の自由主義思想に内在していた限界が批判的に考察されている。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

思想界において「オールド・リベラリスト」と言われた人々に関しては小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社、2002）が比較的大きく取り上げるなど、再検討の兆しが見えるとはいえ、戦前においては自由主義を主導し、戦後においては保守主義に傾くといった彼らの複雑な性格には、明らかにされているとは言えない部分が多く、今日、むしろ彼らの名前は忘れられかけていると言ってもよい。本論文は小説家の豊島与志雄と哲学者の谷川徹三の二人を取り上げ、その精神形成期を含めて、戦前戦中における彼らの自由主義者としての表現・言論活動に焦点をあてて論じたものである。

特に、中国滞在経験のある豊島と谷川の自由主義思想が中国との関係から戦時期においてどのように位置づけられるのかについて考察を進める点に、本論文の問題意識の際だった志向性がある。日中戦争期における日本の知識人の中国に関する言論活動について自由主義という観点から検証された研究は、これまで比較的少なかったと思われるが、本論文はその欠を補う役割を果たしていると評価出来る。また、豊島と谷川という、異なる分野で言論を行った書き手を扱うことによって、文学史と政治思想史を横断的に捉える視点が用意されている点にも特徴がある。

対象に対する批判意識が鮮明であることも本論文の特徴の一つである。修養主義から教養主義への転換期に精神形成を行った谷川の例をもとに自由主義の根幹にある対規範意識にも論及しながら、多文化主義への可能性を内包していたその思想が戦争状況において限界を露呈したことがきびしく批判されている。その批判は中国体験や中国の知識人と交差するところにおいて本質を突いたものとなっている。豊島が関わった〈東亜文芸復興〉や谷川の東西比較論が翻訳なども含めて中国側にどのように受容され連繫し得たのかという課題が提起されている点にも、従来の研究の不足を補う意義がある。また、谷川の若き日の作文集や豊島の1940年の中国訪問時のノートといった、これまで未刊行の資料を発掘したことも、本論文の大きな功績である。とりわけ後者のノートについては、写真版を掲載し、翻刻されて解題を付されており、今後の豊島与志雄研究の基礎資料となることは間違いない（資料を提供した遺族によって豊島と谷川の接点が得られたことなど、今後の調査のさらなる進展も期待できる）。

もっとも、豊島・谷川の思想と中国理解がその限界とともに持ち得た可能性への言及が少ない点、〈行動論理〉という視点がテキスト間の多様な関係への視野を妨げている点、論理展開が裁断的で、〈協力／抵抗〉という二項対立的枠組みを批判しながらそれを克服し得ていない点、日中知識人間にあり得た呼応や共振について看過されている点など、本論文には幾つかの問題点がある。とはいえ、これらは今後の研究の進展によって十分に改善できるものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	張 鈴
試験担当者	主査	名古屋大学	教授	坪井 秀人
	委員	名古屋大学	教授	加藤 國安
	委員	名古屋大学	准教授	日比 嘉高
	委員	関西学院大学	教授	大橋 毅彦
(試験の結果の要旨)				
<p>名古屋大学大学院文学研究科（課程博士）審査内規第5条および第6条にもとづき、平成25年11月11日午後3時より2時間にわたり、文学研究科130会議室において試験担当者一同、申請者に面接し、論文内容および専門分野における研究能力について口頭試問を行った結果、申請者は合格と認められた。</p>				